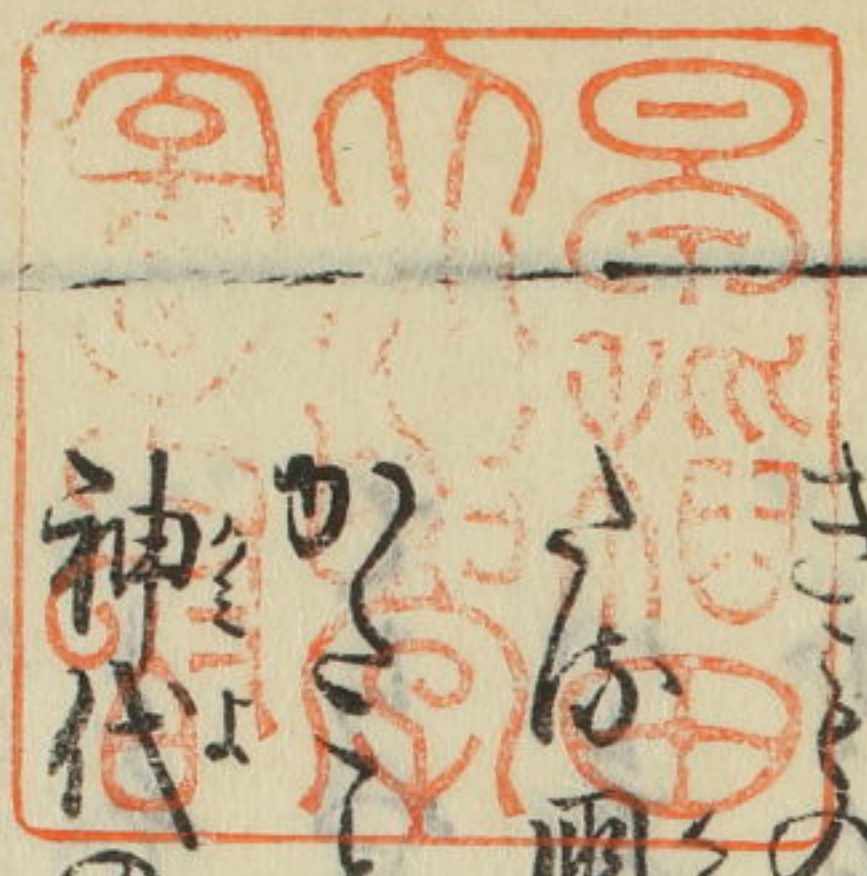




町人婦生活
三

108
3





町人囊卷二

或人の曰町人此詞ことばあまらふ様さまなりてはるおし
さしのちりいしあらぬ都みやこの詞ことばよりい生なまつま
はの國くに紳しん談だんをて國くによれた物ものをた都みやこの詞ことばより
かと多おほしつありの詞ことばなりとて笑わらふをうは
かの遺い風ふうハ結むすぶ外ほか都みやこよ結むすぶとあはる
か多おほくともやの屋やとて多おほく詞ことばを具たもつてつた
かし人ひとをそつとあはるまはるん一ひとつ編へんを
か拵しらぶつた字あ及およびはるあはるはひ出でるもく
かつたきけをしとてつたをしとてつた

町人囊卷三

三

をくまきたのこ

あむい 母依り又阿妣るるべし妣ハ母依り

いの餘音いつまはら故よあむいつり

てく 又をいふ字拾遺物語よるべし

とそと五音相通どてつハ別らかり

てらやう むらゆらゆらゆら家のあふト又

ハ年おけりものをいふ親をいふり亭長

かたぐい

むぢり 足といふ破茅るるべし或書乃中

母茅乃始く土中より生じりものを破

茅といふてつりその書ハ名依り

かき孫てんごう

いの 獲恩といふせんで五十日の内なるもの

をいふてつり誕生より五十日ハ五十日の悦

とて秘するあり源氏物語をいふてつり

げらやう 外科といふり外症と書り字林

拾葉よるべし

かほい ころみかり員といふせらねし

をいふてつりあしりころみかりと

いふてつり

おろしー ざんねをいふゆゑにさういふ言ひを
 おろしと書かなくとも「おろし」にさういふ言ひが「治
 る」とあるといふ名に「よ」をそへて「おろし
 ち」といふ言ひは是れこれわれをさすといふを
 これ子個たる「物」の「おろし」を「おろし」にさす
 ひざう「不便」たる「おろし」は「無慮」たる「おろし」にさす
 遺物語もさすといふ
 らろしと「物の目録」に付来るといふ言ひは「おろし」に
 らろしと「治」拾遺物語にさすといふ
 右の「おろし」にさすといふ「おろし」にさすといふ言ひは「おろし」に

二京の「おろし」は「おろし」にさすといふ言ひは「おろし」に
 おろしと「おろし」にさすといふ言ひは「おろし」に
 瓢箪 瓢箪は「おろし」にさすといふ言ひは「おろし」に
 蒲團 蒲團は「おろし」にさすといふ言ひは「おろし」に
 鍛冶 鍛冶は「おろし」にさすといふ言ひは「おろし」に

誤冶の字は治の字に誤るもの也といふ
 但久しといふ神代より和語にて日本紀よ
 鍛部は字とありし訓より後世は白誤
 とかやち物なりといふる者くば鍛冶乃二字
 と誤りいあるは鍛冶乃二字の鍛はらして
 冶は鑄物師の事なり

甲曹 日在してハ甲と云ふといふ曹と云ふ
 いといつて入り甲はよりい曹はよりい
 ころらぐいものなり

家者

ふこのあり日在してハ内のまといふ

誤かる一内のまといふ猪といふもの也
 乃まといふは猪の字も誤かる一
 ぬこの惣名なりといふ

鴨

字書と考ふふありはる也家鷺をい
 とるより又家鷺ハ鷺事なり野鷺といふ

ハ能形かよりいふてハ日本のありといふ
 家鷺から事数なりハい鳥の字とあり
 坊主 五髪のものなりてハ誤り僧の一
 坊をいおらものなりハ一人いといふ
 中て新髪といふ坊主といふいあり

汚坊けんぼう人を焼やめのも也なりつやへい死人しにんのとりあつた
い傍家そうけより皆執と行ぎやうくより其導師しどうしおどる貴き
 て汚坊けんぼうといふもの也なり近代俗人しんたいぞくじんの賃銀ちんぎんを
 とりて死人しにんを焼やめ汚坊けんぼうといふものなり
 といふもの也なり汚坊けんぼうといふ貴きくちんがうとい
 へばややくけり又あり
 右のふけをくひかき盡つくべしおそくして知
 へし詞ことば人ひと事ことの用もちを違ちがはるるものなり
 誤あやちりたおちりつて入いるもの其終しゆうくも
 ちがひて害がいをいへりて改かむ事ことありべし

と可たるん

或人あるひとのいふ富貴ふきといふ町人百姓ちやうじんひやくしやうのう人をいひわ
 る富ふの財寶さいぼうありや否いなといふ貴きの官位くわんゐをいひわ
 町人百姓ちやうじんひやくしやう金銀財宝きんぎんさいぼう貯たくわへりといふ
 誤あやかたは町人百姓ちやうじんひやくしやう無官無位むくわんむゐの者もの何種なんしゆ財宝さいぼうの貯たくわ
 ありといふ富ふといふは貴きれ字じの如ごとく辨わべし
 下したに其様そのさまを教しなすのまは字じといふ各別かくべつ也なり我家わがや乃すなは
 圓白えんぱくと申まをす事ことありおのづから内うちへといふ何なにた
 外そとへは我われの富ふをいひわらふといふは
 其れ富ふの身みなりといふは過あや美み学がく本ほん類るい乃すなは

風解とるんものむえ乃悪じ處かり危角金銀
 人貯ちまひ美人のふるまひとあてもお急の物也
 と心得るもの也町人百姓財宝ものとい富浪
 者又いふらといづる有徳といふ根存乃徳有
 人の事也町人百姓の有徳ハ利徳の徳也有徳人
 といふ道徳ハ徳といふ唯一の徳にして不惑といふれ
 ろる人哉学者も同て云地獄極楽ハ有と心して徳ハ
 や又ありと心して徳ハ徳ハや学者も答て云有と心
 して徳ハ徳といふも町人以下ハ勅といふ徳
 かり公おかりやす聖人世もあつといふた万民

を盡く教へて道と志りし徳あるものといふと民をば
 依るし一むしう況や事代の人ハ邪欲驕慢
 多し地獄極楽死後性ありと志せし徳も也
 いふハ聖徳太子我國ハ佛はと弘ち徳いハ此
 来来の徳といふく万民とあされ戒ち多し天下と
 おさる神道乃きとけとあ徳いハあやち子れ五
 憲法の中にも佛はをりて王はの外護といふと
 のも徳いハ也王はハ則神道なりといふは死
 て後有りたれうの候りされ魂魄の約束と沙
 汰ハちものされハ愚蒙乃町人百姓の思ふも

ところなり其れをくむ常以万民にあり
 ありん天下を平れ基をん此れ地獄極樂死
 後より有と云ふ人よいつかありと云ふをて
 事たりあつは小今代の出家いれ申いん高
 き道理と説きくをゆくりをたすを此町人百
 姓よ教へて地獄死後小あつたごといひまうする人
 小今代の善きれ女人童子も地獄の沙汰をな
 せしむる百千人の中いれ信實ふありと云ふ人
 稀也聖徳をまじ王は乃勵とかいひいれ申
 ふりあつたまわゆる結句末代よあつてい王は乃

害と云はる事多きなり太平記の評判の中いれ
 記より委しく彼書と考へて町人百姓といふも
 少く道理をも学ひたる人を地獄者とていれ
 かせいなく地獄かゝるとて不義とていへき理は
 極樂ありとていれゆりに安樂なるふりいれ望
 りと云ふ人あり其人のいれいれ地獄天堂乃沙
 汰い入るるに或侍病死し候る時出家のいれ
 考へて平生修業とていれ信ひぬ性生報なる
 べしこれ一念を信じていれ侍記よりて云
 極楽といふや成不ぞ偽の云七寶を地へいれ

飲食衣服あつたればあつた寒く熱く常
 小安樂なりおちなり侍の云う種い公家上臈女人
 希子の扱いも是不具れ病者あどいさゆうるる
 又信居して志くれば我勇士の家おせれて雨は体
 ひ風小櫛さうり或時い石松花と苦松志と種と
 平生此を公共さうりなく款と亡が忠松君り
 盡さんものとさうりたさうりた此をさうりさうり
 と何ぞさうりさうりたさうり安樂して優くと目とお
 ろんやあつたやの極樂世果中頭とさうりさうり
 くらや又或町人出あつた回て云人死してせられん

ふまの實り物家の云魁より有事あり町人の云われ
 死さば何よりせられんや侍の云貴方の件はけり
 ちびとつた常に慈悲心あて正直さうり又人間よ生
 まほひまひ今一等富根なる人さうり又い或あよまれ
 めいなん町人の云おくあさけさうりさうりか今我身
 乃分派して三人家内眷属多く事繁くお若し
 子孫の井さうりさうりてより悔しんや今一等富根
 身とさうりさうりさうり本心と旁さうり事あつんや又
 或家おせられんさうり迷惑あり一生ま若めお
 うさけさうりておのいさうりさうりさうり利を第一さうりて

人の目益せりうらむるを以て喜びの事と
 せんよりの事とせし町人こそ樂けれ一生吾も公は
 とありて死ぬるやうある嫌の事よきされりやなる
 事公さんより口惜き此身中くいさきのいさし
 とやんとして道にあらざる事ありとらひしとらわ
 かやある得公の人よの地獄極樂の教をくた悪
 行をいふとくはまてふ武すく武まてふとよれ
 町人も町人ふこそよれ那智の天下三日といふ見
 よりの鶴よされて千年といふれんこそあまふ
 くれと詰り終り

或人の曰今代町人百姓の中に特くの藝術者あり各
 其道とりて人は教でふ或い秘密口傳の大事と
 考へて他人を誰と事其長は心を傳うべき事也
 夫口訣秘密よ四のあり實秘陰秘利秘妄秘之
 学問の深奥秘公れ人の覺る事いわけ徳公うさね
 功を積むる河公とて傳ふるは實秘より孔子罕に
 利と命と仁と公のさふい一貫と曾子に傳ふ事の
 考ふ見也或い始よりあつてよし府いあつたにゆき
 くまて町人位よりなれたぬく篤く其事を抄ひ
 たりんそ秘を事あるは陰秘より或い世より知人

かくたふと掲^{あかし}加^かて後世の神^{かみ}とまわる事と人多く
 知^しわら河^かの功^{こう}のまろ利^り徳^{とく}ととれまはる秘^ひして人よ徳^{とく}
 ころ事^{こと}のり是^{こゝ}の利^り秘^ひたり或^{ある}は藝術^{げいゆつ}者^{もの}と信^{まを}人^{ひと}
 いふれる人の其^{その}道^{みち}の何^{なに}もじやまきさうと人よ非^{たが}同^{どう}せ
 られておや^あ是^{こゝ}悟^{さと}とあてまらぬく^くの事^{こと}孫^{まご}たりとあ
 もいふまの秘^ひ密^{みつ}口^{くち}傳^{でん}のまろ容^{よう}易^い辨^{べん}ど^どじと^い
 て適^{あて}く^くわり是^{こゝ}妄^{まが}秘^ひたり此^{こゝ}不^ふ持^ぢくの秘^ひ密^{みつ}者^{もの}と
 いふも此^{こゝ}四^し程^{じやう}を^を出^だく^く以^も根^ね本^{ほん}を^を地^ちの道^{みち}理^り聖^{せい}人の
 教^{けう}誡^{じやう}のまろ何^{なに}の秘^ひ密^{みつ}といふも^もろ^ろあ^あ人^{ひと}を^をた^たま^ま代^{だい}
 人^{ひと}れ^れま^まろ^ろの邪^{じや}知^ちありて信^{まを}實^{じつ}あり^{あり}ま^まあ^ある^るで^で秘^ひ密^{みつ}

をま^まろ^ろの^の也^{なり}ま^まを^をあ^あり^りて持^ぢく^く藝^ぎ術^{じゆつ}の^のあ^あり^りと^とあ^ある^る
 知^ちと^とあ^ある^るじ^じつ^{じつ}知^ち以^も志^しを^をい^いふ^ふ是^{こゝ}志^した^たら^ら也^{なり}の^のま^ま
 い^い聖^{せい}言^{げん}学^{がく}者^{もの}藝^ぎ者^{もの}の^の教^{けう}と^と守^{まも}る^るま^まき^き教^{けう}訓^{くん}なり^{なり}況^{げん}や
 町^{まち}人^{ひと}百^{ひゃく}村^{むら}あ^あの^のく^く家^か業^{ぎやう}職^{しやく}を^をた^たま^ま何^{なに}の^の秘^ひ密^{みつ}を^を口^{くち}談^{だん}する
 ま^まろ^ろあ^ある^る農^{のう}業^{ぎやう}何^{なに}を^を失^{うし}つ^つと^と商^{しやう}賣^{ばい}計^{けい}量^{りやう}を^を教^けじ^じま^ま
 是^{こゝ}秘^ひ密^{みつ}の^の事^{こと}た^たり^りとい^いふ^ふ持^ぢく^く
 或^{ある}人の^のい^いふ^ふ十^{じゆ}目^めの^のま^まろ^ろあ^ある^る指^{さし}と^と命^{めい}と^とい^いふ^ふて^て信^{まを}人^{ひと}
 け^け奉^{ほう}信^{しん}人^{ひと}の^の心^{こゝろ}と^と善^{ぜん}人^{ひと}今^{いま}諸^{しよ}人^{ひと}の^の談^{だん}ふ^ふ人^{ひと}の^の心^{こゝろ}と^と悪^{あく}人^{ひと}
 なる^{なる}理^りあり^{あり}は^はれ^れる^る事^{こと}代^{だい}よ^よい^いふ^ふも^もあ^ある^るま^まき^きや^やせ^せり^り奉^{ほう}言^{げん}
 ら^らる^るい^いふ^ふ又^{また}談^{だん}ら^らる^るい^いふ^ふ事^{こと}と^と不^ふ奉^{ほう}と^とあり^りて^て名^なの

實よ思ひぬ事後し人のつる事よけとたえける
 幸悪れなり人なる事悪れれと天ぬはるなり
 わりといふはて最かるれ聖人の世に人なる事
 邪しく況や事代よ世のそや今諸人の墨言る人者
 をいつる善人よと毒くぬねる時いごと善人
 といふ又諸人の議つて悪じ人なる故いつる悪人よ
 と毒くぬねる時いつる悪じ人といふはたわりの
 守屋大板といふといふ万人の悪く議ふ上宮を子
 とといふ時い万人の善い墨言る如く守屋の神道と

傳く善い人よと悪人よわりの事いといふは
 ねむるなりかいは世にうへ代き者達の評判あり
 又梶原といふは世にけし大悪人ありと疾く判官敏
 とといふ三葉は善きと善人ありとて世にせよといふ
 判官具負是かり梶原義経よ非義有るをを判
 小松といふ道理よわりのと忠義有るなり義経の
 善い非義多しと事代死よんたり是時天の
 なるなり人なる事と墨ある事われい也人多く向
 いたり勝天宮にせぬ人を制といふなり一且
 人なる事といふと終は天なる事なり降を

として人の心をさしおろすは不利なる人をかり愛し我ら
 不利なる人を悪く諷し此故は何業のそと諸人必
 利徳の本をとりて諸人恨むとあり何のけりとも
 の譽れあり平家は著しく万民退屈迷惑せしむる
 義経の武切小うて平家亡して万民恨む平家必
 義経と譽愛し大賞ありとあり愚小不慮に抗
 原義経の非義を認めしに依て義経罪を得て流
 浪の身と成給ひて万民其子細の恨をいれり
 みけといひては判官殿痛しや抗原あやしくなり
 ついて知れしむるもふしむるもて終始けはく終よ

終よ後代よとの諺をみたり常より義経天下万民
 乃るよ平家とそむるにありて父の忠教あるよ
 信くわらわられたる万人其切の大方に公譽愛せし
 以て其切は非義ありと諸人忘れらるるのかり
 ねんされ其愛公志の悟あり且善と知るのい
 天下のそとれは理也これの恨をいれりよ世
 間の毀譽褒貶は信て人は善悪は定むる理あり
 天はるる命をけしん天のそとる命にあらざるは
 意ありて一旦の譽れありとあり其實は世の善悪
 少人の譽れ何そとあり況や町人利根才者公

りて人品とあり人倫と禮義とけくろひの上
 ざりて然るまじして一旦の譽れを得ては其身の
 ばはけり見とまひけりこれをまひまひと婦女の
 非くは愛をわんてみふ一まこらけりまひと
 まひ又人倫のめまひとされ

或所人つちて人よ身代も然るものありてぬく
 ことありけりけりふ或出家といふてつるは何事
 とも世にせむいそせむといふてつるは
 ともいそつるは道とて彼人となりてこのをを
 たりとありし人よ今又なれはるぬれまひの

されこのをぬれぬれ罪とけりけりけりけりけり
 とも其は古風吹てむいれとあるねは本然のそを
 まいけり人となりあり

茶の世よわが風をちきぬらん今今風をそを
 ともめて物ありはまひもまひとまひ

或人のいつか依怙具顯負といふ非なる人を
 ともすやいふいふいふいふいふいふいふいふ
 脚をそ曲むるを捨是ちるけりまひんとする
 くらぬ依怙具顯負といふ自ら顯負い力とて物を
 ともす依怙い人よいふいふいふいふいふいふ

見れ人を賜るからる事、依怙といつて理と非よ
 曲か事といひあつて、さういふやと社乃龍宮
 し正直の一旦の依怙、あつてのあひ観音經、
 依乃依怙とあれ、神も佛も依怙、あつて、
 伴神何と理と非よ、曲か事とさういふやと見かたの依
 那、さういふ事、私思てさういふ、私曲偏頗か
 といふ事、さういふ事、
 或る者のいふ、世乃諺、陰陽師身の上と、
 といふ、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
 悪く、夢をさういふ、桑田といふ事、
 居る名、桑田の巫

成りて夢をとら、とら、とら、とら、とら、
 と食、と食、と食、と食、と食、
 かく、病いと、病いと、病いと、病いと、
 下に、在、在、在、在、在、
 病、病、病、病、病、
 といふ、といふ、といふ、といふ、
 を、を、を、を、を、
 汝、汝、汝、汝、汝、
 と、と、と、と、と、
 さん、さん、さん、さん、さん、

厨のうらに隔つて死を待たせり振る新姿を終り
 念より事をしり相こて桑田の巫女を後をいつるの
 れこつひのむきりきつるふ是程よ人の上は事をして
 遠のこまよりあつる程のれりおのこを晋侯の親よ
 せんといふものといふつるつるいふれおの也振る事
 命いとかく老一とつるつて悟るいよりはこつる
 ざの新姿をいまの候ききやかく餘りの子細もたて
 いひおへ都て今の世に世教のる長と多く取
 ち死所人よ陰陽師の軍らつるま親む事多く
 て迷いころく事む多く是とて過風よいあつるが秘

密にけりれ人のいひあつる幾よゆあつるれといれ
 或人学者必因て云町人なるの学問とつる何の用か云人
 うや学者を身て云身をいふ家とてその人あせといふ
 又同身てあつる家はくこの序より書く学者のいふ
 吾等如町人といつれい身をて亡くも死なまつるといふは
 此学者かたわて言つるいふて中ら此人又或学者たよお
 のあつる同い此学者言つていれい町人の学問いれい
 とらん死おといはむあんのあせといふ同学問もあつる
 て盗みする事や者いふは学者の云作のいふ吾等如
 人あつると盗みする人の最稀なりまおつる盗みする

意弘先よりの学者といふは只今公儀中て殊得
 をうらふ教ふこそ恐れて盗する人いふは是の若く今
 亦て不義といはし盗賊とあてし殊得とてうらふは
 作はるゝ大神の学者の不義を以て人多くは
 ちやれ世よ有ては天理と恐れて盗の意不義乃
 念はかゝるもなき人の有るは七十年さして松
 栢彫ふかゝる事と知い学問とて人の第一は
 じいさし處ありといふなり

或西人け学者語て云日本は武國とて質素とてふは
 十武道の質素清浄とては質素なるは

武道強く驕奢なれば武道弱き物也此故に神道
 の質素と教へては質素は則正直の事也此者
 此の心と邪曲ありては宗廟侍務は神
 宮の専らといふは質素を以て信じて是代乃誠とて
 多りの所殿の草蓐淨供いふる米は飯なり膳具は本
 具土器の類とて用て結核委廉から道具と神道
 の用事事は唐寺なり大廟をい清廟とて清浄を
 存し茅葺の屋小黒米の飯なり料理の供物
 味いさばく終りては儀飾著して子孫に示し
 ようた傳はるる是和漢なる質素清浄とて

中よりその也日本の中亦ふりては美民に於ては
 かり其後ろくく過美れ凡俗を以りてはた近代
 の格よへきりしや聖武天皇の神時行幸に命し給
 いて日本國中に人教と記し國郡に境と記し人民
 衣服の高下す人食物の上下美惡を録し其
 其差別を定めし是庶民に黒米の飯法より梳
 ち折麦と用ひしとの格ありし今代本具は各處と
 馳走とすはるも神代傳書清淨の神義とまひる
 りのたりまろふ今河内人を本具振舞しといひて
 本具上品と撰ひ細工舟乗と專らして是とつくと

本具の格ありし今河内人を本具振舞しといひて
 本具上品と撰ひ細工舟乗と專らして是とつくと
 本具の格ありし今河内人を本具振舞しといひて
 本具上品と撰ひ細工舟乗と專らして是とつくと

同人のいつるい今代末夷中にも河内は家居作多居れ
 子世に居れしといふはる神宮の清淨授よの書々る物
 くれ日本の人教いしは十倍より人毎小家居作多
 分海よりするゆへ今や天下に材木費一夥下況や教多
 小寺院其美廉言語を絶と此教は諸國の「材木」
 上は材木近代いかりるなりといふ此驕を費へ

乃方とせしん憚然と佛説又陰陽家の説を
いふまこと不考或書ふいつは北方の冬と年とを陰
の節とて東方の春と年とを陽の節とて東方の東北
の節とて陰の節とて陽の節とて此の節とて節
季とて節分除夜の節を至るは陰を鬼と
陽を神とす陰の鬼とて陽の神とて陽の神とて陽の
鬼の外に冬の陰退くは福の節とて春の陽
神とて夏の陽進くは鬼の節とて秋の陰退くは
此の節とて東北を神明の舎とて神明の位西
のふたり鬼門といふも鬼神の位西のふたり也

鬼神の位西たりとて鬼神といふも東北の間より位居
ありといはれ道埋とて名付たりもの也陰を去
て陽氣来るいりて是の方を禱ふて福とて
乃理也又人の悪心の陰を去り改めて善心の陽
をひきよふを禱ふて鬼門をこそ用ゆべき方
され善心の人位とて事あり何の節といふも
らんやとたり

所人囊卷三終

所人囊卷三

所人囊

